

評議員に就任して

鈴木 増 雄 (物理学教室)



1968年から1973年までの約5年間物性研究所の助教授だった時期を除くと、理学部に約20年近くもずっと在職していたこととなります。久保亮五先生の研究室で院生として朝から晩まで研究にのみ(?)没頭していた頃がついこの間のように懐かしく思い出されます。この4月から、会議の多い理学部執行部の仕事をするような立場になり、研究時間が益々少なくなるのではないかと当惑しております。しかし、選出された以上、理学部の為に尽くす所存でございますのでよろしくお願い致します。

理学部の役割は、理学という基礎的な学問の研究と教育を通して社会に貢献することであることは言うまでもないことでありますが、学部や大学院できちんと教育するには、まず教官自身が最先

端の一流の研究をしなければなりません。特に、大学院では、「背中で教育する」しか、本当に独創的な研究をする人材は育てられないのではないのでしょうか。そのためには、教官自身がある時期には適当な期間研究にのみ集中できるような配慮が必要かと思われまます。現に、長期間の海外出張は、その役割を果たしているのかと思われまます、その恩恵に浴することが出来るのは、ごくまれであろうかと思われまます。国内に居ても研究に専心できるサバティカルのようなものが頻りに認められるようになると、もっと独創的な良い研究が増えるのではないのでしょうか。

理学部の特徴の一つは、自然科学の多彩な分野をカバーしていることであろうかと思われまます。しかし、よく言われるように、現在、異なる分野の交流は必ずしも充分であるとは言えません。他分野の研究者との接触により、全く新しい発想や解決の糸口が得られることは歴史の示す通りであります。かつて客員教授として過ごしたコーネル大学、ハーバード大学、ユトレヒト大学等では、そのような事例を私の分野に限っても多数あげることが出来ます。例えば、コーネル大学の素粒子物理学者K.G. ウィルソンは化学教室のM.E. フィッシャーから相転移の話聞いて、自分の専門分野のくり込み群の理論を相転移の統計力学に使う

ことができることを思いつき、それが大きく発展して、彼が後にノーベル賞を受賞したことは特に有名です。理学部のいろいろな会議でも（あるいは、その前後にでも）、時には、会議の本題から脱線して学問上のトピックス等について専門外の人にもわかるような余談が入る位のゆとりが、もっとあってもよいのではないのでしょうか。

学問的な信頼関係を基礎にして事に当たれば、

理学部のいろいろな問題も、よりスムーズに解決されるでしょう。そのためにも、もっと理学部内の学問的接触の機会が増えることが望ましい。

最後に、理学部が世界の超一流の大学に比して、環境、業績共に遜色がないようになる日を夢みて、その一つの大きなステップとして理学院計画が、早く実現することを願っております。